

札幌丘珠空港ターミナルビル 基本計画 [素案]



札幌丘珠空港ビル株式会社

背景と目的

「丘珠空港の将来像」の実現に向けて



100万人を受け入れる環境整備

資料2

滑走路延長の実現

現在1,500mの滑走路を1,800mに延長することを計画（2030年の供用開始を目標）しており、これによりリージョナルジェット機の通年運用が可能になります。



旅客数の大幅増加

丘珠空港の機能強化に伴い、年間旅客数は現在の50万人規模から、2030年以降は100万人規模へと倍増する見込みで、これに対応する旅客ターミナルビルの抜本的な機能強化が不可欠です。

5つの基本コンセプト

どのような施設を目指すのか



利便性と先進性の追求

資料2

1



コンパクト&スムーズ

現在のビルをオフィスや貨物、ビジネスジェット用に再構築し、新たなビルでは旅客スペースを最大限に確保します。
スマートレーンの導入などにより、ノンストレスでスムーズな利用を実現します。

2



空港業務のDX・AI化

自動チェックイン機や自動手荷物預け機などの最新技術を導入し、省人化とスムーズな手続きを推進します。
地方空港のモデルとなる先進的なスマート空港を目指します。

地域交流とレジリエンス

資料2

3



地域交流機能

地産地消の商業施設、イベントスペースやキッズスペースの設置など、地域住民が集い・楽しめる空間を創出し、丘珠空港及び丘珠駐屯地の魅力発信を行います。

4



災害に強い空港

避難者向けの滞留スペース、備蓄品、電源設備を整備、丘珠駐屯地と連動し、緊急時に周辺住民も受け入れ可能な防災拠点機能を担います。

環境と利用者に優しい空港

資料2

5



サステナブルな未来

ZEB化の推進や自然エネルギーを活用したエコ設計により、空港の脱炭素化を推進します。
ユニバーサルデザインを徹底し、環境とすべての利用者に優しい先進空港を実現します。



施設規模と機能配置

新・現ビルの役割分担と連携

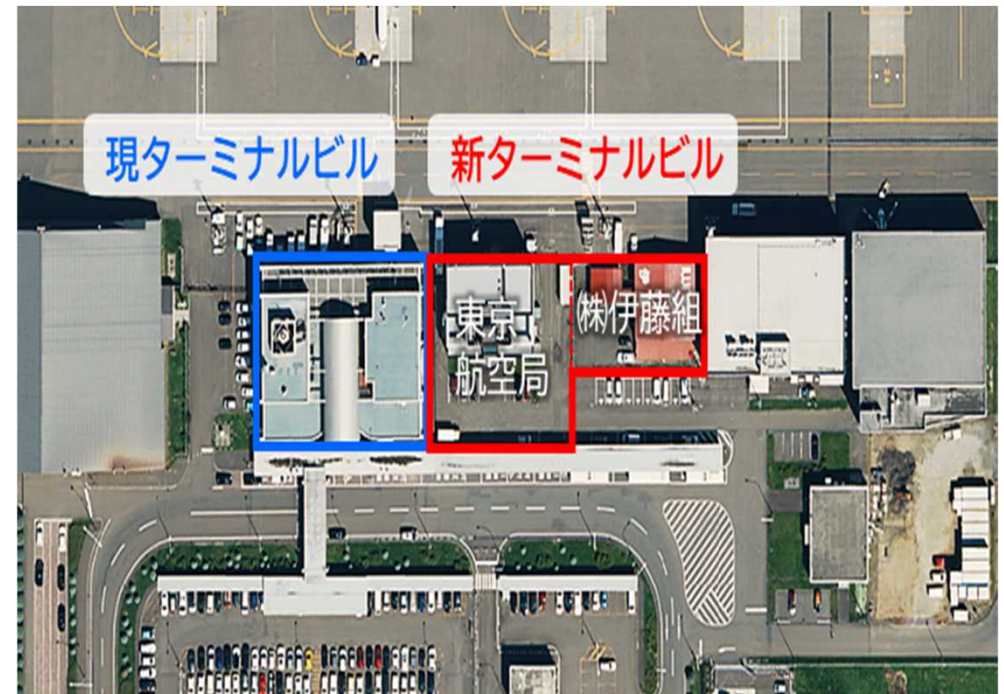


新ターミナルビルの配置構想

資料2

他空港を参考にエプロンサイドに接地する場所をターゲットとし、現ターミナルビルの南東側を新ターミナルビルの候補地としています。

- ▶ 想定建設地: 東京航空局（約1,500㎡）および株伊藤組（約800㎡）の敷地
- ▶ 目標床面積: 新・現ターミナル合計で10,000㎡以上を確保
- ▶ 建設・運用方針: 現ターミナルビルでの運用を維持しながら新ターミナルビルを建設
- ▶ 接続計画: 最終的には新・現ビルを渡り廊下で接続し、旅客と業務のシームレスな動線を確保



新・現ビルの機能比較

区分	現ターミナルビル	新ターミナルビル
主な機能	オフィス、航空貨物、ビジネスジェット施設	旅客エリア（出発・到着）、飲食、物販
建物床面積	約3,620㎡	6,500㎡ ～ 7,000㎡程度（地上3階建）
備考	既存位置で運用	エプロンサイドへ新設

※新・現ターミナルビルは渡り廊下による接続を予定（合計10,000㎡超）

※旅客取扱施設利用料（PSFC）の導入を検討中

計画の主要指標

資料2

100 万

年間対応旅客数（人）

70 便

1日あたりの発着便数

70 億

想定最大事業費（円）

1日70便が結ぶ新たなネットワークと、ピーク時1時間500人の旅客で賑わう、活気に満ちたターミナルへ

この新ターミナルプロジェクトは、丘珠空港を『空の旅と地域の賑わいが交差する空間』へと生まれ変わらせるための挑戦です

将来の収益性を見据えた多角的な事業スキームを活用し、持続可能な事業基盤を確立します

次世代のスマートな「機能性」と地域の魅力が溢れる「賑わい」を兼ね備えた空間を創出し、

ビジネスと観光の両面から札幌・北海道の未来の活力を向上させます

プロジェクト・ロードマップ

資料2

令和12年(2030年)
滑走路延長
【想定】

令和8～9年度

基本計画検討
PI活動の継続

令和9～10年度

ビル設計
詳細仕様決定

令和11～12年度

新ターミナルビル建設

令和12年度

新ターミナルビル
供用開始